

2002年ウィーキャン第4回定期総会 パネルディスカッション

2002年5月11日(土) ゲートシティ大崎

テーマ：「テレワークは21世紀のワーキングスタイルの主流になり得るか？」

パネラー

- ・堀池喜一郎：特定非営利活動法人シニアSOHO普及サロン・三鷹代表理事
- ・広岡 馨：特定非営利活動法人ウィーキャン 理事長
- ・上條 一男：特定非営利活動法人ウィーキャン 副理事長
- ・横坂 敏彦：特定非営利活動法人ウィーキャン 顧問

コーディネーター

- ・玉木 文憲：特定非営利活動法人ウィーキャン 理事

手話通訳：佐野 和子

今回のパネルディスカッションは時間切れのため、ディスカッションの部分はありません。パネラーの方々の活動内容と、在宅就労支援センターの簡単な説明のみになっています。

玉木

障害者にとって、就労が非常に大きなハードルであることは、こちらの会場にいらっしゃる方はよくご存知だと思います。現在日本には身体障害者と呼ばれる人達が350万人。このうち、就労を希望している障害者が先日のNHKニュースの報道では140万人いるといわれています。ただ、実際に就労をしている障害者はほんの30数万人です。

我が国では、障害者雇用に関して法定雇用率が定められており、56名以上の従業員を抱える会社は従業員数の1.8%以上の障害者を雇用しなくてはならないことになっています。

現在、この雇用率を達成している企業はおよそ半分です。

法定雇用率未達成の場合は未達成人数1人につき、月額5万円の納付金を国庫に納めることになっていますが、この総額が年間で二百数十億円という大きな金額になっています。

私ども障害者にとりましては通勤の壁、就業時間の壁、トイレやエレベーターなどの物理環境の壁、また、「どうせ障害者だから」という一種の差別意識のようなもの、こういったものがバリア(障碍)になり、なかなか就労できないでいます。

ただ、世の中を見回しますと、働けないのは私達障害者ばかりではなく、シニアと呼ばれている高齢者の方々、育児にあたっていらっしゃる主婦の方々も一種の就労障害者であろうと考えています。

こうした方々に「テレワーカー」 今まで漢字で「在宅就労者」と呼んでいましたが として働く機会を提供をしていきたい、またその為の仕組みをつ

くりあげたい、そのためにいろいろなバリアをクリアすることを目的として、私どもウィーキャンは日々活動をしています。

今日こちらにお集まりのパネラーの皆様もそういう日々の活動に携わっていらっしゃると思います。4人の方々のご意見を伺っていきたいと思います。

ここでパネラーの方々を簡単に紹介させていただきます。

まず、一番手前に座っていらっしゃる堀池さんは、昭和16年東京生まれで私達の中では一番先輩です。某大手電機メーカーの家電品製造工場で生産管理、また、OA機器の販売部門のシステムエンジニア、販売員教育などに携われた後、少し飛ばしますが三鷹のシニアSOHOを立ち上げ、会社の役員を兼ねながら運営され、平成12年からこれに専念されています。

平成12年の12月にはウィーキャンと同じようにNPOとしてスタートされまして、現在、代表理事をなさっています。

次に、隣に座っていらっしゃいます横坂さん。先ほど総会のあとに理事会を行いましてウィーキャンの顧問をしていただくことになりました。昭和20年千葉県のお生まれです。

岩崎通信機の技術部門、企画部門、営業部門に携われ、開発子会社、シンクタンク、販売子会社、ソフトウェア開発子会社等々のご出向も経験され、現在はケイワークという会社の代表で、「在宅オペレーション用テレホンサービスシステム」を開発されました。同時に、テープ起こしや文章入力の仕事でお世話になっているNPO法人「知の市庭（ちのいちば）」の理事もなさっています。

その隣はウィーキャン理事長の広岡さんです。広岡さんはこちらに並んでいらっしゃる5人の方の中では一番若い昭和31年宮城県のお生まれです。

職業訓練センターでコンピューターの専門教育を受けられたのち、ソフトウェア数社を経験され、平成8年に障害者就労支援任意団体のサイバードを立ち上げられました。

ウィーキャンの立ち上げにあたってご活躍いただき、6月30日まで理事長の要職についていらっしゃいます。先ほどの総会が終わりました後の理事会で7月1日以降は副理事長としてウィーキャンの中で活躍していただく予定です。

最後に一番端の上條さん。今までウィーキャンの副理事長、本部の事務局として活躍していただいていたが、今度は理事長に選任されました。

昭和27年長野県のお生まれで、株式会社リコー在職中にプールの飛び込みで首の骨を折り障害者になられました。国立職業リハビリテーションセンターでコンピューターの専門教育を受けられた後、平成3年に福祉パソコンの会を立ち上げ、障害者のコンピューター利用の普及を進めてこられました。

広岡さんと同じように平成10年にNPO法人ウィーキャンを立ち上げ、副理事長、本部の事務局という要職を務めておられます。

早速ですが、パネラーの皆さんの日々のご活動についてお話をさせていただきたいと思います。最初は私どもの中でただ一人シニアを対象にNPO活動をし

ていらっしやる堀池さん、よろしく申し上げます。

堀池

シニアSOHOの堀池です。私はウィーキャンのメンバーになり1年近く活動しております。

ウィーキャンの事務局からシニアも障害者も同じであり、協力して活動しているのではないかとご提案いただき参加しました。

今日はシニアの活動を通してのテレワークの今後の課題ということで、シニアSOHOについて簡単に説明したいと思います。

皆さんのお手元に3月に書いた、ある雑誌記事が配ってありますので、詳しいところはあとで読んでください。

見ていただきたいのはシニアSOHOのメンバー数250名、などが書いてある3ページ目です。

かいつまんで申しますと、55歳以上で元気なシニアがいろいろな知識や経験を持ちながら定年になって、家で遊んでいるとか、海外旅行しているとかが多いのはまずいのではないかと。持っている知識が定年になったら消えてしまうわけではないので、それを使って社会活動をしよう、できるなら有償で責任ある仕事をして、小遣い銭も稼ぎながら自分の得意技を発揮して元気でいよう。と、こういう会をつくりましたところ意外に反応が多く、1999年10月に70人で始めました。

先ほど上條さんがウィーキャンはプラットフォームだとおっしゃいましたが、この会の性格もこれです。

シニアが地域のビジネスに参加するのはなかなか難しいことです。会社でのピラミッド型の組織の中でではなく、一人で地域のビジネスに参加することは簡単にはできないのです。

地域の人達とどのように交流していけばいいのかもわからない。そのための手段としてのメールがありますが、このメールは高齢者の方ではできないことが多いのでIT習得をする。そして、どういう仕事を始めたらよいかということもわからないので、いろいろな人と会って交流する。このために月例の飲み会をやっています。

事例を聞いて、意見を聞いてあとは飲み会。これは大変人気です。最初70人くらいの会員数で始めた頃でも50人くらい集まりました。今の会員は250人ですが、八王子だとか、中野、田無、稲城だとかという所に多く、三鷹市内に住んでいる人は40%しかいないのですが、今はだいたい80人から90人が毎月集まります。3次会4次会までやり、朝まで飲むということを毎月繰り返しています。

このようなことから会の特徴として顔が分かっている人が多い。ですからメーリングリストに月に1,300件くらい書きこみがあって非常に活発になっています。

また、これをやりたいと決まってもなかなか発信ができない。そこでサーバー

を持って発信というものを一緒にやってみようというようなことも試みています。

会はプラットフォームというのは正にこのようなことで、仕事を取ってきて配る会ではなく、仕事はひとりひとり自分の一番やりたいことをする。日本人形を作って教室をしたいという人は日本人形を作る。それを今度はホームページを作って発信する。そういうことをこの会で勉強しようというわけです。

また、今この会がITの活用や会員の勉強が非常に上手だということで、行政から「市民に教えることをこの会でやって欲しい」とう要望が出てきたことについて少しご説明をしたいと思います。

この、行政の希望で行うことになったパソコン講座は、私どもの会ができたばかりで教える人も不揃いでしたので苦労しましたが、平成12年度の1年間に1,000人、ホームサポートも500人行って、三鷹市周辺のIT弱者支援の大きな流れとなり、各講座を行った中でたくさんの講師が生まれました。

初めてお金を貰って人に教えたという人が1年間で35人ほど出ました。現在はIT講習も行い60人ぐらいになっています。

私どもの考え方は、ウィーキャンとも一致しますが、有償である、ボランティアではやらない、といっても価格的には安いということです。しかし、有償であるからには1,000円でも3,000円でも払えば講習者はお客だということなので「金払っているんだからちゃんとやってくれよ」と言われる。それを乗り越えるところに生きがいを見出し、自分は有用なのだとなるように緊張感を持って毎日過ごすことができる。そういうことを考えてやっています。

この経験は、これからウィーキャンがこういった講座を行っていくときに、費用の問題、行政とのかわり、価格をどうしたいかということについては少し役立つであろうと思います。

私どもが成功した一つの要因として、アドバイザー認定研修というものがあります。これは企業内でパソコン講習などにあたっていた専門家が集まり、技術研修と、特に教え方研修についてかなり高いレベルの仕組みをつくり、12時間の特訓を終了した人を初めて人様の前に送り出すという認定研修で、現在115人がこれを受けており、だいたい月に6、7人ずつ送り出しています。この研修で自信を持ってなんとか人に教えられるようになり、サブを経てそれから講師になる形で行っています。

現在IT講習は三鷹市で3,500人、杉並区で1,200人に対して行い、今年は世田谷区でも各種の講座を展開するため、これも一つ一つ手作りしながら講座を作ってきています。

最初、三鷹市の行政から、私どもは業者、というか安い業者という形で考えられていましたけれども、今はそうではなくて、提案をしてくれるパートナー、協働、これは協力して働くという字を書きますが、この協働作業として、私も言いたいことを申し上げるし向こうからもかなり厳しい話が出るようになりました。

今年は緊急地域雇用基金を活用して、平成13年度の三鷹市のIT講習を終えた

6,000人の人向けの無料の相談コーナーを設けました。これは、12時間のパソコン講習が終わっても忘れてしまう方、シニアの方に圧倒的に多い一人暮らしとか二人暮らしで、何処でパソコンを買っていいのかわからない方、プロバイダーをどのように選んだらいいかわからない方、そういう方達の相談が多いので、相談センターを実験的に平成13年度1,200人に対して行いました。また、平成14年度はこれを3倍にして4,000人くらいに対して私どもの相談員が相談センターを行うことになり、三鷹では先ほどのアドバイザー研修をすることによって循環して生徒の中から先生をつくりだすという構造がだいたいできてきました。

最後に一言申し上げますと、私どもは今まで補助金を一銭ももらったことがありません。必ず委託事業を行い、それに対して報酬をもらうという形で考えていきたいと思っています。また、IT講習だけではなく、リサイクルであるとか学校の総合的学習の視野に向かっていくことにこれからは重点を移して行こうと考えておりますことを付け加えて、お話を終わります。

玉木

ありがとうございます。単なるIT講習というものを抜け出てコミュニティのネットワークを広げたり、地域のコラボレーション事業のようなものも兼ねていらっしゃるということで承りました。

次に、横坂さんですが、現在ウィーキャンの会員を対象にテープ起こしと文章入力の実践研修をしていただいていますけれども、このビジネス研修を通して障害者が在宅で働くことに関して見えてきたものがございましたらお願いいたします。

横坂

今ご紹介頂きましたように、私が今ウィーキャンでやっているのはビジネス01というメーリングリストでのOJTです。

実は今日あちらにお見えになっている「知の市庭」の代表、東島さんとは相談の上で展開しているのですが、各地の講演会のテープ、その他を文字にするという仕事を題材にして、ウィーキャンのメンバーで希望する人達にOJTを行っております。

OJTを行うにあたり、事前に玉木さん、上條さん達ともいろいろ意見交換しましたが、障害者になる前にどの程度の仕事経験があるかというところに着目しないと、仕事というのは降ってくれば誰でもできるわけではないのです。ワープロが打てれば仕事になるかということ、ならないのです。

一般の会社でも、先輩社員や上司におだてられたり慰められたりしながら仕事を覚えていく、あるいは周りの先輩社員の仕事を眺めながら覚えていく、これはオンザジョブトレーニングという、仕事をしながらの教育であって、学校を出てもすぐには役に立たないとはそのことを言ってるわけです。

そういうことが仕事に必要なであると考えてみますと、かなりの方が仕事はした

い、基本的には字が読める、書ける、しかし仕事はやったことがない。この場合に、仕事がやれるかということ、皆さん本能的にご存知ですから、ほとんど期待通りにできないということを知っています。

従って、会社としてそういう所に仕事を出そうとした場合には、出すはずがない。私であっても出さない。

そうすると、初めての方からある程度仕事ができるところまでという、普通の会社なら日常的に行われているOJTといわれるような物を代替りのパターンでやってみるしかないじゃないか、ということなのです。

「やめた方がいい」とか、「無茶言うな」というお話は大分皆さんから聞きました。

普通に考えたらできそうにないことにチャレンジするからには常識は捨てようと考えました。与えられている条件は、顔を見たこともない人達ですし、極端なことを言いますと、その方達の障害の状況を私は分からないわけです。それでもやっていこうとなったわけです。

手段はメーリングリストだけ。となると、常識はやめた方がよろしい。では非常識なこととは何かということ、メーリングリストというのはメンバーの都合を考えてあまりダラダラ書いてはいけないとなっているのですが、そんなことはこの際、別の世界の話ということにしましょうと。

OJTのように周りといろいろ分かり合ってやって行くということになると、余分な情報も含めたくさんのことを気軽にやる、それでお互いに理解しあえるというところがないと仕事の段取りまで行かないだろうということもありましたので、片方では仕事の話をしながらか、もう片方では井戸端会議どんどんやれみたいなことをやって、現在に至っているのです。

見えてきた物をまずかいつまんでお話しすると、期待以上です。

人材といいますか、持っている潜在能力という点では私が期待していた以上、つまり私が期待していた以上ということは私が相談をした皆様が期待していたことの遥か上、ということなのです。私の方が期待していた、その私の期待よりさらに高い可能性を感じています。

ただこれは、あくまでも可能性でして、磨かないと光らない「可能性」です。ですから、正しく導くということではなく、ご本人達が気付いてお互いにその道に進んでいくようなことを見守っていく、あるいは必要なときにアドバイスをするという、気の長いスタンスが必要だろうと思います。ですがそこで感じられるものは、世の中で一般的に行われている「お勉強」のレベルと比べると、遥かに高い可能性が見えてくると言えます。

これは今のうちにお話したほうがいいのですが、私がやっているのは第1段階でして、狙っているのは私が外れることなのです。そのときに私の代わりに誰かがするのではなくて、こういうことを通して、今携わっている人達、一緒になってやっている人達の中で、相談しながら物事を自分達で進めていく、自分達で考えながら、あるいはチャレンジしながらやっていくという、そういう仲間を作りたいなと、そういう人達を増やしていく、あるいはいくつも作ってい

く。ウィーキャンとしてのパワーはそこから生み出されるだろうと、その辺りを狙っています。

今までも気が長いと言われてきましたが、まだまだこれからも気が長いつもりで取り組んでいきます。それにふさわしいくらい可能性のある人材がたくさんいます。

それが今まで、その方達の才能どころかその方達の存在さえも見えていなかったというところが最も素晴らしいことであり、もったいないことであり、ということを感じております。

玉木

ありがとうございます。堀池さんのお話と共通する部分もあるかと思いますが、横坂さんのチームと一緒に仕事をなさっているメンバーからこういうメールがきています。

「横坂さんは、いつも答えは教えてくれません。ヒントをくれて、そのヒントから考えるだけです。そのヒントさえ、なぜ、今、自分にこのヒントなのか？と考えるところから始まるときもあります。一見まったく的外れなヒントのようで、実は的を突きすぎている怖いヒントのときもあります。それに気づくかどうかはあなた次第と、ひょいとして出てくるヒントにいつも緊張します。嫌な緊張ではないです。」

なにかものすごく面白いメールだなと思って、これを皆さんに紹介いたしました。

次に広岡さん、スタンバイOKでしょうか。

今まで理事長をなさってきて、ウィーキャン運営につきましているいろいろご苦労もあったかと思いますが、実際にウィーキャンの理事長という要職に携わってこられて、テレワーカーの現状とは一体どうなっているのだろう、このところをお話いただけたらと思っております。

広岡

横坂さんのやってらっしゃるメーリングリストを、私も一応アドバイザーというか、覗き見をさせて頂いています。そうしますと、これは見ていらっしゃらない方にうまく伝わるかどうか分からないのですが、私にとってはもう、ドラマを見ている感じです。ほんとに。人間ってこんなに変わるのかなあと、まざまざと見せつけられる思いです。

私がこういったテレワーカーという、そのころはそういう言葉もなかったのですが、その可能性を感じたときの話です。私が仕事で使う業務用のコンピューターですと、汎用機やワークステーションがあって、ワークステーションを主に扱っていました。

今ですとドライバをインターネットからダウンロードしたりというのは日常的になっています。けれども、1992年頃の日本では、まだ一般民間の会社では商用でインターネットに接続している所などないような状況でした。その頃に

は、ワークステーションを買ったとしても、ドライバとか新しい物を手に入れようと思うと、代理店がサポートといって高い値段で大きいテープで持って来たりするので。

今ですとダイヤルアップでドンドンと落としてくるわけですけどね。その頃、かろうじてニフティでアメリカのワークステーションメーカーの本社に繋いで、たかだかフロッピー 1 枚分のドライバをダウンロードするのに 3 時間くらいかかりましたかね。ずっと繋ぎっぱなしにしました。

でもそのとき私は感激したわけです。3 時間で落とした物をワークステーション本体に落として、それでチクチクとやってみたら、差したフロッピーのランプが光って、5 分くらいしたらアップデートのフロッピーができてしまったという体験。これがものすごく私にとっては新鮮な感覚でした。そのときふと、「あ、何かが変わりそうだな。」という雰囲気を感じたのです。これは代理店、いらなくなくなるんじゃないかな、と。

その頃ちょうどワークステーション関係の記事を扱っている雑誌の中で、今盛んに言われているリナックスという物を作った人のこと、フィンランドのほうで、どうも学生がそんなことをやり始めたらしいという噂を見聞きして、「これとこれがあれば代理店にあんなに途中で金ふんだくられている必要はないよね。これって、世の中の仕組みが大きく変わるんじゃないのかな。」と感じたわけです。

そういった可能性を感じて会社を辞めたわけですけども、じゃあこれで独立できたか。

この仕組みを利用すれば障害者だってできるのだからとうことでみんなに呼びかけて、一緒にパソコン使って仕事をしようじゃないかって始めたわけです。でも、はっきり言って甘かったです。やはり今横坂さんが仰ったように、来た人達が仕事をしたことが無い人達ばかりだったのです。パソコンのことを覚えてとしても仕事のやり方がわからない。

そんなことさえ私は気が付かなかったのです。パソコンを教えるということで最初は活動を始めたわけですけども、今はもう、パソコンのことを教えるなんて、どうでもいいことだと思っています。まあちょっとは大切かもしれないですけども、やはり仕事する方法、仕事をする楽しさをどういうふうと感じ取ってもらえるか。そういうことに非常に重きを置いて活動するようになっていきます。ですから今までのウィーキャンの中でも仕事をしたことの無い人達に仕事の面白さ、それから辛さもあるのだけれど、辛いということはその後にもっと楽しいこともあるわけで、そういったものをよく知ってもらうこと。これから本当にそういう活動を展開して行きたいです。そしてそのヒントを横坂さんに与えて頂いたと思っています。

玉木

ありがとうございます。次に上條さん。

上條さんは常日頃から中央省庁また民間団体などと触れ合っていっしょいま

すが、その中で障害のあるなしにかかわらず、テレワーカーの現状が、今、実際はどうなっているのだろうかということについて教えていただけませんかでしょうか。

上條

お話する前に、玉木さんからご案内いただいた次期理事長に就任せよという先ほどの理事会の決定について、力及ばずながらも一生懸命努力していきたいと思っておりますので、改めてどうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

では、現状のテレワーカー、とりわけ障害者、シニアに絞って申し上げたいと思ひます。

今、広岡現理事長の言われたように、新しい可能性がインターネットの中に見出せたというのが10年前です。私も福祉パソコンの会を立ち上げて活動を始めたのが今から11、2年前です。その間の経緯や考え方、あるいは思ひはいろいろな文書、マスコミ等に載っていると思ひます。ですからこれは皆さんご存知ですので省きます。

私が感じてきたことは今現状のテレワーカーについて、今はテレワーカーという言い方をしますが、当時我々は在宅就労という言い方をしました。

障害者もようやく働ける時代が来ました。どういう働き方か？それは家に居たまま当たり前前に働くことです。

そのような働き方は内職ではないのか。いや内職というのではなく、会社に勤めているときと同等の働き方ができる時代が必ず来るはずで、それに気がついたので5、6年前。

でも、それは一部のエリートに限ってでした。例えばプログラマー、デザイナーあるいはWebでもかなりレベルの高いWebを作れる人、翻訳家。そういう方々のいわば独壇場だったわけだ。

しかし、先ほど堀池さんがお話されたようなIT講習会によってこの国の人口の4分の1の方々はおそらく多少はキーボード触ったことがあり、今、家で働きたいと思ひている方々は、こういう方々なんです。

コンピューターがだんだん当たり前になってきた時代の中で、どこでも文字が打てますとか、チャットで遊んでいる人のようにブラインドタッチで特に速く打てるという、そんな方々が参入してきているおかげで、可能性が見えて来ました。スキルの高い仕事以外に誰でもできる仕事も一方ででき、いわばテレワークという世界ははっきり二分化してきています。

我々は当初、障害者が自立に必要な収入をたくさん得られるための仕事というのはなんだろうと考えたときに、それは入力ではないと思ひました。入力業務を選んで障害者を雇うということは一般の主婦の方や、あるいは内職的にされている方々と競合することになる。これをやると、稼ぐためなら寝ないでも働くようになって体を壊すことになるでしょう。これを我々はやりたひわけではなく、スキルアップしようということはずっと言ひてきました。しかし、後で言ひますが、その考え方は今変わって来ました。

ではその思いを、働くという、テレワーカー、在宅就労という部分で考えたときに障害者は何をすればいいのでしょうか。そのところが4、5年前ウィーキャンが立ちあがる前からいろいろ考えていたことです。

我々がスキルアップして仕事を受注してやること、それが普通かもしれませんが、しかし、障害者ということを経験していると、これまでこの国では10何兆という福祉予算がかかり、あるいはいろいろな仕組みの中で、あるいは特殊法人のいわゆる天下り官僚などを雇っているようなところも含めて多様な形で障害者をサポートしてきています。そこに莫大なお金が使われてきている。ではこの恩恵にあずかって仕事をしている人はどれくらいいるのでしょうか。先ほど玉木さんから案内があったように、実際390万人のうち就労している障害者は1割しかいません。

この1割というのは基本的には在宅ワーカーではありません。既存の働き方に適応した人達が約1割。ではその仕事に適応するためにはどうすればいいのでしょうか。職業訓練を受けなければなりません。では、職業訓練を受けられる障害者はどれほどいるのか。これはもう1割もいません。そういうところに入る門戸が非常に狭いのです。

これはおかしなことです。莫大なお金が使われていて、そこに入る人が少なく、そして働ける人が1割にも満たないような状況の中でお金が使われてきた。これはちょっとおかしいじゃないか。ということを経験して5、6年前から考え始めていました。

要するに、社会の仕組みを変えないといけません。社会の仕組みを変えと言っても、別に国のお金を下さいと言っているわけではないんです。これまで国が保護してきた我々障害者が、いつまでも保護されたいのか。あるいは保護され続けなければならないのか。

ようやくインターネットとかコンピューターが進化してきた時代の中で、新しい働き方、企業に所属したり、雇用されなくなったり個人としての働き方が可能になってきた時代に、障害者もようやく遠くの方にはあるけれども光が見えてきたのではないのでしょうか。

社会の仕組みを変えるためには個人ひとりひとりで参加すればいいというものではなく、そのために何が必要かということ、力が必要です。パワーです。パワーを集めるためにはどうしたらいいのでしょうか。390万人の障害者と、これから3,000万人を超えようというシニアとが合体してプラットフォームをつくり、なるべく緩やかに、みんながいざというときに力を合わせる。そういうプラットフォーム的な場所がまず必要ではないか。それを4、5年前に全国に呼びかけました。

玉木

すいません上條さん。実はあと5分しかございません。そこで、今日、総会の中で出ました在宅就労支援センターですとか、それに伴ういろいろな教育のシステム、そこらへんを掻い摘んでお話いただけませんか。

上條

まず、在宅就労支援センターですが、先ほど申し上げたプラットフォームを上手く駆使して、産官学との連携の中で新しい障害者の仕事の場所を作ろうと、その場所だけではなく、情報の蓄積場所をつくろう。これは単なる情報の蓄積場所ではなく企業とも連携していこうと。要するに、上手く産官学の連携のプレートを作って、我々と国と地元行政と民間企業、これらが連携しながら、しかし、障害者を主体とするウィーキャンがリードし、横坂さんを始めとしているような企業、あるいはサポーターの方々がサポートする。その仕組みを東京と大阪で本年度立ち上げるという計画を作っています。

これは、約1,000万円から1,500万円がとりあえず始動予算です。その中で新たに参加していただいた、今日いらしている静岡・大阪の活動団体、あるいは他の全国の団体を始めとして皆さんで連携しながら、これを盛り上げていく方向とします。

大阪の責任者は玉木さん。東京は新たに理事として推薦した鈴木さんをお願いして、今後具体的な就労支援活動を進める拠点とします。

同時にネットワークにおける拠点づくりを進める、これが在宅就労支援センターです。

主に連携しているのは日本テレワーク協会です。以上です。

玉木

どうもありがとうございました。駆け足になってこの場では皆さんになかなかご理解いただけなかったかと思えますけれども、今までゼネラリストが一般的であった世の中の仕事の世界において我々が目指していくところは本当のプロ集団なのではないか。

プロになっていくためには僕達はどういうことを積み重ねていかななくてはいけないかということをおのあと懇親会がごさいます。こちらに座っております者全員が参加しますので、皆さんの問題の解決につながっていくことができればいいなと思えます。

今日はお忙しいところ、また遠いところをお集まりいただきましてありがとうございました。パネルディスカッションをこれで終わらせていただきます。また本日手話のご協力をいただいた佐野さんに拍手をお願いします。（拍手）